写真右上は、決して公には顔を見せない彼から、その代わりにと送られてきた、アトリエで撮影された等身大のパネル写真。左はすべて2002-2003秋冬のルックブックより。最下段ではモデルが「13」のプレートのペンダントをしている。また、3回めを迎えるリフト エクリュでの、彼の世界観を表現するプレゼンテーションが現在開催中。お問合せは、リフト エクリュ、電話03-5459-0635へ。

CAROL CHRISTIAN POELL

キャロル・クリスチャン・ポエルのパーソナルなクリエーションの世界。

日本の場合はさしずめ「4」がそれにあたるのだろうが、欧米で言えば、「13」は縁起が悪いとされている代表的な数字である。ホテルの部屋番号などでは抜かれてしまうことも多々あるくらい忌み嫌われているこの数を、キャロル・クリスチャン・ポエルはこの秋冬のモチーフの一つとして使っている。

「みんな、『13』を不吉な数字と決めつけているだけで、実際には必ずしも悪いことが起こるわけじゃない。つまり、既成概念を打破することで、バッドラックはグッドラックにもなりうる。その象徴としてバッドラックのいちばん代表的な例である『13』を使ったんだ」

ほかにも、長い間放置したことでほこりをかぶったように見える、完成品の上からフロッキー加工を施したジャケット（写真左上から二番め）や、腕を交差させて指の中に入っている死者をイメージし、クロス状の形を残してフロッキー加工を施したTシャツ（写真左上）など、一般的にはネガティブなイメージを持たれている事柄を、あえてクリエーションの中に取り入れている。また、昨年の秋冬物にも登場したツイストシリーズは、彼によると「今起こっている社会現象は、いろいろな要素が複雑に絡み合って生まれたものであり、一つの面だけではなくねじって見ることで、違う側面を発見できるかもしれない」というメッセージを、ねじれたフォルムのシャツやパンツ（写真左上から三番め）で表現したものだという。

キャロル・クリスチャン・ポエルの作り出すモードにはこのように、常に彼自身のパーソナルな視線が反映されている。ちょうど一年前、彼は本誌一二月号でのファックスインタビューに答え、自身のデザインする服の世界を「ACCIDENTAL（偶発的な）、FLAWED（ひびの入った）、IRONIC（反語的な）、STRANGE（不可思議な）」と形容したが、それはまさに彼の視線そのもの。同時に、その独自性ゆえに必然的に高くなるであろう、モードに落とし込むためのハードルを、確かなテーラリングの技術と実験的なオリジナル素材によって越えている点も見逃せない。出身地のオーストリアでファッションデザインを学んだ後イタリアに渡り、一度はフリーランスのデザイナーとしての職に就いたものの、あらためてヴェネツィアのファッションコスチューム大学とミラノのドムス・アカデミーでテーラリングを学び直したという経歴も、彼の服作りに対する真摯な姿勢と、彼のモードがコンセプト倒れに終わらない底力を物語っている。

「僕がいちばん興味があるのは、新しいファブリックや服作りに関すること。だからこそ、素材開発から完成まで、すべての工程は自分の目の届くところで行なっている。モードを通じて社会的なアクションを起こすつもりもないし、ましてや自分自身が着飾って表に出ることには全く関心がない。僕にとってモードはあくまでもパーソナルなものなんだ」